

百済王敬福と金900両

ここ国指定特別史跡「百済寺跡」を顕彰するのが、私たち「百済の会」の活動の目的であります。その百済寺がここに建立される原因となったのが、百済王敬福という人が聖武天皇の大仏建立に当たって、金900両を献上したということにあります。今から1260年も前の話であります。今日は、その聖武天皇の大仏建立のことで敬福の金献上ということを中心にしてお話しさせて頂きたいと思っております。今日は時間が短縮されていますので駆け足でお話し致します。

もう何度か私の話をお聞き頂いた方も多いのですが、初めての方にもやはり百済王とは何者かということを知って頂きたいと思っておりますので、どうぞ復習のつもりでお聞きください。今までとは違ったお話しもさせて頂きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

1. 百済国の歴史

(1) 百済国の盛衰

先ず百済という国を簡単に述べておきましょう。

百済とは朝鮮半島に4世紀から7世紀に掛けて存在した国であります。この頃は三国時代と呼ばれて、北の高句麗、南の東半分の新羅、そして西半分の百済という3つの国が鼎立して勢力を競い合っていました。最後に新羅が統一して三国時代は終わるのですが、この三国時代にはわが国即ち倭国との関係が大変深かった時代であります。倭国も半島にかなり大きな権益を確保していたようでありまして、3国と倭を加えた4国が利権のために争った時代と言ってもよいでしょう。

百済は346年に都を漢江の南の漢城に定めて古代国家体制を作り上げていますが、475年に高句麗に攻められて南方に退却し都を熊津に移します。今の公州です。その後百済と新羅は両国の間にある伽耶という地域を巡って争い、倭を巻き込んだ抗争が行われます。丁度、樟葉宮で即位した継体天皇の頃で6世紀の初めです。そして、百済は538年に更に都を泗沘（今の扶余）に移すのですが、新羅は伽耶地域の最も有力な国であった高靈伽耶を滅ぼしまして、伽耶にあった任那日本府というわが国の権益も消滅してしまいます。562年のことです。

これに対して百済は巻き返しを図っていましたが、642年になって義慈王が新羅に攻め入り、伽耶地域を奪還します。この時に倭国と同盟をするのですが、その人質として王子の豊璋と禪広をわが国に送ってまいります。しかし、半島に勢力を伸ばしたい中国の唐が新羅と結んで百済を攻めたものですから、660年に遂に百済は滅亡してしまいました。

(2) 白村江の戦い

この百済の復興を志して立ち上がったのが鬼室福信でした。倭国にいた王子豊璋を担いで百済復興を企てます。そして倭国に援助を要請します。倭国としても半島での権益を回復するチャンスですから、進んでこの復興運動に協力します。時の天皇は女帝の斉明天皇ですが、後の天智天皇である中大兄皇子が摂政となっています。王子豊璋に大織冠という最高の冠位を与えて百済に送り出し、天皇と中大兄皇子は自ら九州まで出かけていく程の力の入れようだったのですが、天皇は九州で亡くなります。百済の内部で豊璋と鬼室福信が対立し、福信が殺害されるという内紛が起こります。そして白村江の戦いでは倭の水軍が唐によって壊滅的な打撃を受けて敗走します。倭の水軍が主として瀬戸内海、朝鮮半島の海賊などで構成されていて、彼らは戦争の論功行賞に与ろうという魂胆で参戦していますから、われ先にと功を急いで全体としての統制が取れていません。という状態ですから、戦力的には4分の1という唐の水軍に簡単に敗れてしまったのです。こうして百済の復興は失敗に終わります。豊璋の行方は分っておりません。

2. 百済王

(1) 百済王禪広

この敗戦によりまして中大兄皇子は唐の進攻を恐れて、対馬や筑紫その他各地に山城や水城を築きます。そして重臣たちの背反を恐れて大和に帰ることが出来ず、近江に新しく都を開いて天智天皇となります。新羅と親しかった蘇我氏をも尊重せざるを得ないという不安定な政情の中で、曾我氏をバックとする弟の大海人皇子を一旦は皇太子に立てますが、唐と新羅が抗争するという事態が起こって唐の脅威がなくなり、わが国が安全であると分つてくると、天皇はわが子大友皇子を改めて皇太子に立てます。そして天皇の没後、大海人皇子と大友皇子が皇位を争うという事件が起こるのです。672年のことで、これを壬申の乱と言っております。

この乱では曾我氏の寝返りによって大海人皇子が勝利し、即位して天武天皇になります。その後唐が新羅によって半島から駆逐され新羅が半島を統一しています。天武天皇は新羅との親交を強めていきますが、律令制国家を確立し、伊勢神宮の祭祀を重要視して天皇の宗教的権威も高めました。天皇という呼び名もこの時から始まります。明治政府が伊勢神宮を中心として国家神道と天皇の権威を高めて神国日本をでっち上げましたが、その伊勢神宮に権威付けしたのがこの天武天皇です。

その天武天皇が686年に没して、鸕野讃良皇后が即位し持統天皇となります。持統天皇は天智天皇の皇女で、一般的には皇后として天武天皇を支え、天武朝を継承した方とされていますが、藤原鎌足の子不比等を重用し、天智系の天皇体系を作ったのではないかとの見方もあります。そのような天皇としてみると、持統天皇が百済の王子禪広に百済王という名をお与えになったことも、すんなりと納得できるのではないかと思います。鎌足が百済の王子豊璋、即ち禪広の兄であるという興味深い説がありますが、もしそれが本当だとすれば、鎌足の子である不比等が持統天皇に進言したとも考えられます。

天智天皇によって難波に土地を与えられていた禪広は、この百済王という名を貰ったことによって、百済からわが国へ亡命して来た人たちの中で、また先に渡来していた多くの百済系集団の中で、指導者としての権威を与えられることになったと言えるでしょう。百済王家の権威が倭国において公に認められたということになるわけです。こうして百済王家がわが国で活躍することになる土台が出来上がります。

(2) 百済王敬福

禪広の子孫は、昌成、郎貞と続いてその次に敬福が登場します。敬福は禪広の曾孫に当たります。その敬福が738年に奥州の陸奥介になり、743年には陸奥守になります。その背景には727年に渤海国の使者がわが国にやってきたということがあると思います。渤海国というのは668年に新羅によって滅ぼされた高句麗の人たちが、中国の東北地方、戦前戦中に満州と言われた辺りに建設した国家で、対新羅政策のため倭国と軍事同盟を結ぼうとして使節を送って来たのです。

その使節は24人で出羽に漂着しましたが、その地の原住民である蝦夷によって16人が惨殺され、8人だけがやっと奈良の都に来ることが出来て聖武天皇に謁見します。それ以後奈良時代には13度に亘って使節がやってきますが、その警護が重要になります。対新羅という点では渤海と意識が共通しますので、敬福はむしろ進んで陸奥国の警護に赴いたのではないかと想像できます。

敬福が陸奥守になった743年は、丁度聖武天皇が大仏建立を発願された年に当たります。そして749年にはその鑄造がほぼ完成に近付いておりました。しかし大仏の仕上げに使う金が不足していて、聖武天皇がノイローゼ気味になっておられた時、敬福が金900両を献上したのです。仙台の北10キロほどのところに涌谷という町がありますが、そこから砂金が採れたのです。勿論、敬福に同行した百済の技術者が金を採取する技術を齎したものと考えられます。聖武天皇は大いに喜ばれて、敬福を7階級特進させられて従三位宮内卿とし河内守に昇任されたのでした。

3. 聖武天皇と大仏建立

(1) 聖武天皇とその時代

ところで、このようにして敬福が脚光を浴びた背景には、聖武天皇の大仏建立という事があるわけですので、この辺の事情をお話したいと思います。

聖武天皇は724年に即位されますが、そのお母さんは藤原不比等の娘である宮子です。皇后もまた不比等の娘である光明子です。このように聖武天皇は藤原不比等の懐の中に封じ込められているといっただけでしょう。そんな状況に反発したのが長屋王で、高市皇子の子ですから天武天皇の血を引いておられますが、729年に藤原氏の謀略に陥り天皇に対する反逆の罪を着せられて自刃して果てます。738年になりますと全国的大飢饉が起こって餓死者が続出、天然痘が流行して、藤原不比等の3人の息子は朝廷の重要なポストにいましたが、この天然痘に罹ってみな死んでしまいます。740年には大宰府にいた藤原広嗣が反乱するというように、次々と大きな問題が発生します。

もともと病弱であった聖武天皇はノイローゼ気味となって、5年に亘る彷徨の旅が始まります。今の加茂町のところに恭仁宮を建設したかと思うと、すぐにまた紫香楽宮の造営が始まり、そこで不審火に悩まされると難波宮に逃げて行き、5年経ってやっと元の平城京に戻られます。この間の紫香楽宮におられた時に大仏建立の発願をされました。743年のことです。この年に先程お話ししましたように百済王敬福は陸奥守になっているわけです。平城京に戻られた天皇は、大仏の建立地もここに移されます。

この大仏建立を発願されるについては、河内の柏原に行幸された折にご覧になった知識寺が大いに天皇を刺激したのではないかとされています。この知識寺跡は今でも柏原市太平寺町にあるのですが、この寺は百済から渡来した人たちが資金を寄進して作られたもので、塑像の大仏があったようです。知識という言葉はいろいろな事についてよく知っているということですが、その知識に基づいて有益なことに寄進するという意味もあります。知識寺とは要するに寄進によって出来たお寺であるということです。聖武天皇は、大仏建立と共にこの方式によってお寺を建てることを決心されて、全国に寄進を呼び掛けられました。その勸進の大役を任されたのが行基であります。行基は当時の仏教界からは爪弾きされていたお坊さんでしたが、壘田開発や慈善事業などで民衆から大きな信頼を集めていましたから、聖武天皇はその行基の力に目を付けられました。こうして多くの寄進によって大仏の建立が進んでいくわけであります。なお行基の開いたお寺としては、枚方では樟葉の久修園院が知られております。

(2) 大仏建立と百済人

この行基も百済から渡来した河内の文氏の子孫と言われていますが、大仏建立に携わった人たちの中には多くの百済人がおります。むしろ、百済の人たちがいなかったら大仏は出来なかったであろうとさえ言うことができます。

まずこの大仏の仏師は、百済滅亡の時に渡来した百済の大臣級の人物である国骨富(こくこっぶ)という人の孫である国中連公麻呂であります。大仏の姿の気品というものはその顔によって決まりますが、特に目が大事ですね。そのデザインをして、その作り方を指導するのが仏師の大きな仕事です。現在の大仏様は再建されたものですから、創建当時のお顔と同じであるかどうかは分かりませんが、大仏様のお顔をゴンドラに乗って間近かで見られた方の話を聞きますと、遠くから見た仏様の顔はたいへん柔和であるのに、近くで見ると凄く怖いお顔であったそうです。全体のお姿の中で、どのようにデザインすれば拝観する位置から見て最高のお顔になるのか、そのところを的確に決めるのが仏師の手腕なのでしょう。きっとすばらしい出来栄で、聖武天皇も大満足だったことと想像されます。

聖武天皇は756年に亡くなっておられますが、大仏が完成した後で大仏殿が建てられておりまして、あの大きな大仏をどのようにしてあの建物の中に入れてのたろうというご心配は無用であります。大仏殿は771年に完成しておりますが、この建築の大工の棟梁を務めたのが猪名部百世(いなべももよ)と言いまして、これまた百済から渡来の木工師の子孫であります。現在の建物も再建されたものですから、奈良時代の姿がどのようであったか分かりませんが、恐らくそれ程違ったものではなかったでしょう。このように大仏も大仏殿も百済の技術によって出来上がったと言っても過言ではありません。

このようにして長い年月を費やして完成した大仏殿でしたが、どのように工事が進行したのでしょうか。天皇の大仏建立発願は743年紫香楽宮においてでしたが、奈良の都における建立工事開始は2年後の745年8月22日であります。5年の彷徨の後に平城京にお帰りになった聖武天皇は直ちに建立に着手されました。746年には土で固めた大仏の塑像が出来上がり、その供養を9月29日に行っておられます。その塑像の内枠と外枠を作り、その間に銅を鑄込んで銅像の大仏を作り上げます。その鑄込みの完成したのが749年の10月24日でしたが、完成が近付いても仕上げの鍍金に使用する金の手当てが付きません。

天皇は大いに悩んでおられたのですが、そこに陸奥守百済王敬福から金900両が献上されたのでした。そこで750年には金鍍金の仕上げ工事を始めることが出来、752年4月9日に天皇は大仏の仕上げが未完成のまま開眼供養を行われたのでした。天皇は仕上げ工事の完成を見ずに756年に崩御されましたが、翌757年に遂に大仏が完成しました。その後先程話しましたように、大仏殿の建物工事が進められて771年に全ての工事が完了することになります。

4. 敬福の金900両献上

(1) 陸奥国の産金

先程も述べましたように、百済王敬福が陸奥守であった749年に大仏建立のための金900両を献上したのですが、仏師国中公麻呂と敬福の何らかの関係があったのではないのでしょうか。公麻呂は陸奥国で金が採れたという情報を得ていて、敬福に要請したことも考えられます。それはともかくとして、金がどこで採れたのかと言いますと、当時陸奥国の国府がありました多賀城から北の方に約10キロの小田郡涌谷というところですよ。この産金を記念した黄金山神社というのが建っています。日本三景の一つである松島辺りの道路を通りますと涌谷という地名が入った道路標識にお目に掛かります。

さて私ども百済の会では、この金900両に因みまして金箔入りの清酒「九百両」というオリジナルブランドを、枚方の地酒醸造元をお願いして造って頂きました。吟醸酒もごございます。紙箱にはこの900両の説明を記載しております。贈答品としてもご利用頂きたいと思っております。会場内でも販売させて頂いておりますので是非ご覧ください。ちょっと宣伝をさせて頂きました。

この900両というのは大仏の金鍍金用としてはかなり不十分な量でした。では、残りの金はどうなったかと言いますと、陸奥国多賀郡から北の地方に対して調・庸という租税はすべて黄金ですることにして、正丁4人で1両を収めるように決めました。そして毎年少しずつ鍍金が施されて、757年にやっと完成という運びになったわけでもあります。

(2) 大仏金鍍金の金使用量

900両は大仏に不十分な量であったと申しましたが、ではどれくらいの量が必要だったのでしょうか。788年と言いますと平安時代に入っすぐの頃であります、「延暦僧録」というのが編纂されていまして、そこに記録が残されています。それによりますと、金の総必要量は4187両だそうです。900両というのは、必要量の4分の1にも満たない量だったわけでもあります。

ところで、1両は4匁という換算であると理解してきましたので、これまでは1両は15グラムというお話しをしてきましたが、4.4匁という1割ほど多い換算もあるようですので、これに従いますと16.5グラムということになります。そうして計算しますと900両は13.5キロ～14.85キロということになります。また、必要総量の4187両というのは、大体63キロ～69キロです。大仏の表面積は527平方メートルだそうですから、1平方メートル当たり金120グラム～130グラム位の使用量になります。現在の鍍金技術ですれば、金をかなり薄く延ばすことが出来るのではないかと思いますので、もっと少ない量で済んだのではないのでしょうか。

5. 河内守敬福と百済寺建立

(1) 河内守敬福

先にお話ししましたように、百済王敬福はこの金献上の功績によって7階級特進で従三位宮内卿となり河内守に栄進しました。百済王一族は禅広が天智天皇から与えられた攝津の難波におりましたが、河内守として新しく交野の地を与えられて移り住みました。ここ枚方の中宮であります。そして百済王家の氏寺として建設したのが百済寺でありまして、その跡がこのように国指定の特別史跡として整備されているわけであります。

最近の発掘調査によって、この百済寺が天皇によって立てられた所謂官営寺などに匹敵するすばらしいお寺であったことが分ってきました。西塔のところが発掘されていますが、この塔の基壇が当時の技術を駆使して大変丁寧な工事がなされていたのです。埴仏(せんぶつ)が壁面などに施されていたようで、それもたくさん出土しました。埴仏とは仏様を形どったタイル状のものです。今年の2月には大阪府の有形文化財に指定されています。これからも継続的に発掘調査されるようですので、どのようなものが出てくるのか楽しみです。

さて、これは以前から分っていたことのように、この地が原野だったところへ敬福の一族がやってきたのではなく、既にかなり開発された街だったようです。敬福が来る以前から何がしかの街が形成されていたようです。そこに敬福が入ってきて更に街を整備し、氏寺を建てたのではないのでしょうか。但し、敬福は766年6月28日に死没しておりまして、寺の建設は出土している瓦などから見て、奈良時代の末の780年頃と推定されていますから、敬福が発願したとうことはあっても建てたということにはならないわけです。その子の理伯の時代ということになるでしょう。そして、孫娘で桓武天皇に寵愛された明信の時代だったかも知れません。

敬福は河内守に任じられて後もまた、752年に常陸守に任じられます。常陸というところは出羽に到着した渤海使節が奈良の都に登っていくときの通り道で、蝦夷に襲われる危険のある土地です。従って敬福は、常陸に赴任して渤海使節警護に当たったと思われます。実は敬福は陸奥介から陸奥守に昇進する前に一時常陸守を経験しています。この時は明らかに渤海使節警護だったでしょう。そして再びその任に当たったということだと思います。

資料に書いておきましたように、敬福はその後757年に出雲守、759年には伊予守、761年に南海節度使、763年讃岐守、764年外衛大将と歴任しています。百済王の持つ軍事力が深く関わった役職だったように思います。渤海使節は出羽の国に多く漂着していますが、日本海沿岸のあちこちにもやってきています。出雲などはその対策ではないのでしょうか。また、伊予、讃岐、南海節度使などは瀬戸内海の警護だったでしょう。対新羅政策だったかも知れません。外衛大将というのは、当時天皇を守護する軍事組織として近衛府、中衛府、外衛府がありました。近衛は近代になってからも近衛兵というのがありまして、天皇を直接守護するのが役割でした。中衛は近衛よりも外回り、そして外衛はもう一つ外回りの警護に当たるといいう仕事です。敵がやってくると一番先に戦うのが外衛府の仕事です。

敬福がその外衛大将となったのは、聖武天皇の娘である孝謙天皇の時代ですが、藤原仲麻呂が権

勢を欲しいままにしており、大炊王を担ぎ出して孝謙天皇に譲位させて淳仁天皇とします。孝謙天皇が弓削道鏡を重用したため、仲麻呂と対立して動乱が起こるのですが、仲麻呂が戦いに破れて淳仁天皇も淡路島へ流されてしまいます。女帝が再び天皇になって称徳天皇となります。この動乱の時敬福は外衛大将として大活躍しております。このように軍事面で多くの業績を残した敬福はでしたが、766年に亡くなったのでした。

(2) 国指定特別史跡「百済寺跡」

百済寺につきましてお話しさせて頂きましたが、その跡が国指定の特別史跡に指定されていることを枚方市民の方でもあまりご存知ありません。日本全体として国指定特別史跡はたった61しかありませんし、大阪府ではこの百済寺跡ともう1つ大坂城跡だけであります。国指定特別史跡は、物であれば国宝と言えるものでして、その重要さをお分かり頂きたいと思えます。

枚方市教育委員会の資料によりますと、百済寺跡の調査は最初昭和7年に大阪史談会によって行われまして、これにより東西両塔を備えた薬師寺式の伽藍配置を持った寺であることが確認されました。そして翌昭和8年、大阪府は史蹟名勝天然記念物保存法に基づいて史跡に仮指定し、昭和16年には文部省によって史跡指定が行われて保存の措置が講ぜられました。

昭和25年に公布された文化財保護法においても史跡指定は引き継がれ、昭和27年3月29日に国指定の特別史跡に昇格されます。その理由としては、「百済王氏一族の氏寺で、奈良時代創建当時の主要堂塔を良好に遺存する稀有の遺跡であり、また伽藍は、百済王氏の歴史的背景と相俟って、古代日朝文化交流の史実を徴証する価値の高い史跡である。」ということであります。私たち百済の会が、ここ百済寺跡を広く顕彰したいというポイントが示されていると思えます。

これからの調査によりまして更にどのような事実が分ってくるのか、興味津々というところです。

早口でそして駆け足でお話しさせて頂きました。お聞き苦しかったことと存じますが、これで終わらせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。